

審 議 内 容

別紙標準様式（第7条関係） **会 議 録（要録）**

会 議 の 名 称	第31期 第9回社会教育委員会会議
開 催 日 時	平成23年3月1日（火） 14時00分から 16時00分まで
開 催 場 所	教育委員会室
出 席 者	西邨定実議長、荒田英道委員、石塚美穂委員、稲田義治委員、 岩谷 誠委員、上田卓是委員、小川温子委員、高木統禧委員、 谷間倫子委員、藤井泰雄委員 [事務局] 社会教育部／岸部長、中田次長、藤井次長 中央図書館／大本館長、竹本課長 社会教育青少年課／武田課長、岡田課長代理、川口係長 北田主任 文化財課／鈴江課長
欠 席 者	植松千代美副議長、青野明子委員
案 件 名	・家庭教育推進事業について
提出された資料等の 名 称	【資料】 ・家庭教育推進事業について（報告書案）
決 定 事 項	家庭教育の推進について様々な方面から話をして、方向性を見つけていく。
会議の公開、非公開の別 及び非公開の理由	公開
会議録等の公表、非公表 の別及び非公表の理由	公表
傍 聴 者 の 数	0人
所 管 部 署 (事 務 局)	社会教育部社会教育青少年課

西邨議長 ただいまから第31期第9回枚方市社会教育委員会議を開催いたします。

(事務局よりあいさつ)

〈事務局〉 本日は家庭教育推進事業について、今期3回目の議論をしていただきます。今日と次回も含め、今期のまとめとしてご報告いただきたいと考えておりますので、よろしく申し上げます。

西邨議長 事務局より本日の委員の出席状況の報告をお願いいたします。

〈事務局〉 本日の委員の出席状況ですが、植松副議長、青野委員につきましては所用のため欠席されておりますので、委員12人中、10人の出席となります。過半数の出席がありますので、枚方市社会教育委員会会議運営要綱第5条の規定により会議が成立していることをご報告申し上げます。

(資料の確認並びに人事異動について事務局から報告)

西邨議長 事務局より「家庭教育推進事業について」報告書案について、説明をお願いします。

〈事務局〉 (資料説明)

西邨議長 ここで、会議の進め方について再度確認します。今期の会議は、今日を含めてあと2回と聞いております。本日は、「家庭教育推進事業について」報告書案を元に議論を進めていきます。そして、委員の方々からの意見を踏まえて修正したものを7月予定の最後の会議までに事務局より送付していただきたいと考えております。

それでは、各委員のみなさん、よろしく申し上げます。
まず最初の「はじめに」という文章についていかがでしょうか。では私から「保護者のエンパワーメント」という部分について、もう少しわかりやすく説明をしていただけますか。

〈事務局〉 「保護者が価値観の違う方と出会ったり、さまざまな実践活動を行っている人たちと交流する中で、潜在的な能力を引き出され、課題を乗り越えていく力がついていく」ということです。

西邨議長 エンパワーメントと書くと簡単なんですが、難しいですね。

〈事務局〉 表現を工夫します。

西邨議長 他にございませんか。ご意見があればまた戻るということで。次に「2. 家庭教育の本質について」はいかがでしょう？

(発言なし)

では私から「3. 親と子どもの関係について」の中で、「親の額の汗と無言の背中だけで子どもはすべてを理解することであり…」というのは、少し気になります。このすべてというのはいかがでしょう。親の背中を見て子は育つといいますが、親が一生懸命働いて、子どもに何にも言わなくても、親の背中を見ていたら、子どもはすべてを理解するものでしょうか。

高木委員 日常、家庭で起こるその時、その場の大小の出来事に対する親、保護者の有言、無言の判断、処理、指導の積み重ねのすべてが子どもの将来に与える影響は大であることを親、保護者は常に自覚、認識しておくべきだと解釈していますが。

岩谷委員 文章表記だけの問題なので、例えば「子どもは親の額の汗と無言の背中を見て多くのことを学んでいくのである」としてはどうですか。

稲田委員 「1. 家庭教育の本質について」のところですが、「例えば…」以降の文章が気になります。「しない、迷惑をかけない」というネガティブな表現ではなくて、「こういう大人になってほしい」、「夢を持って生きてほしい」というように、もう少し前向きに書いてほしいと思います。

上田委員 反対側から読んで、ポジティブな表現に変えたほうがいいかもしれませんね。

稲田委員 そうですね。夢や目標を持つ子どもに育てたいという言葉にしてもらえたらと思います。

荒田委員 家庭教育の本質で、親が願うということは納得できるのですが、親が義務を全く無視して、権利ばかり主張する、そういう親が増えてきています。具体的にいうと、子どもの能力とは別に高い要求水準を持っている。その辺、家庭教育は、親がしっかりしないと子どもの教育なんてできないのではないのでしょうか。

もう1項目「親業教育」が必要ではないのでしょうか。

西邨議長 「親と子どもの関係」ではなくて、家庭教育を推進するには、親

単独でというような項目を一つ設けたらというご意見です。何か具体化するにはどのような方法があるのか、どうでしょうか。

小川委員

数年前、社会教育青少年課の家庭教育推進事業で「10歳の壁を乗り越える」ということで、親学のことをしゃべらせてもらったことがありました。その後、幼稚園で就学前の子どものお母さんや校内でお話しさせていただく機会がありました。その中で見えてきたことは、今のお母さんたちが困っていることとは「自信がない」ということ。自分がやっていることに自信がないのです。だから、少しお話を聞いてあげて、それで合ってますよ、大丈夫ですよ、元気出して頑張ってくださいねというように、肯定的な言葉をかけてあげると、すごくよかったです、明日から頑張ろうと思います、というように返ってくる人が多いんですね。荒田委員が言われたように、今の保護者の中には、大変な方もおられます。けれども、その方に幾らこちらが働きかけても、かなり難しい面がありますので、肯定的な考えの方を増やしていく方法をとっていかないと、全体的によくなくなっていかないと思っています。

昨日、実は1、2、3、4、6年生の保護者と、私とうちの学校の教職員で合計合わせて11人だったんですが、いろんな子育てについての話をしました。すると、1年生の保護者が困っていることを6年生の保護者が回答されました。すると、あっ、そうだったんですかと言われていました。今日の私へのお便りの中で「昨日、上の学年の方のご意見を聞いて安心しました。元気が出たので、明日から頑張っていきます」というようなお返事をいただきました。

自信を持たせてあげてを家庭教育推進事業の何かに盛り込みながら、しんどいお母さんも確かにおられるんですが、しんどいことを肯定的に変えるためには、どうしていったらいいのかということ働きかけるものがあれば、私は変わっていくなと思います。

だから、地道な活動なんですけれども、一遍に何かしようというのは無理で、5年前にその親学に係わったときに、メールアドレスを書いていたんですが、どんなお顔の方か覚えてないんですが、時々メールがくるんです。そのような時は「いいですよ、お母さん、それでいいですよ、間違っていないから頑張ってくださいね」と2～3行しかメールで返さないんですが、お母さんからは「ありがとうございました。明日から頑張ります、息子に対する自分の向かい方がちょっと否定的でした、もっと肯定的に向かっています」というお返事をいただきます。子育てに自信のないお母さんたちが増えているという感じはしています。肯定的に何を具体策としてやっていくのか考えないといけないということです。

もう一つなんです、実は2枚目のデータ、ちょっと今変化して

きていると思うんです。2月27日か26日付の新聞で、虐待している人の半数が実の母親ではなく、同居の男性のデータが上がっていました。新聞の読み間違いでないと思っていますが、どのあたりを切ってデータをとるかによって私は違うと思うんです。だから、こうして言い切ってしまうと、今後出ていくデータにちょっと無理が出てくるかもしれないので、こういう場合もあるというように、今言われていることを、書いておいたほうがいいかなと少し思いました。

藤井委員

小川委員がおっしゃっているのは、多分、警察の発表データからです。厚生労働省による児童相談所の統計では、基本的に、半分は実の母親からの虐待なんです。ただ、実際、業務に携わるケース・ワーカーの立場からすれば、いわれるように、男性の姿が見え隠れする場合が非常に多いんです。ただ、本当に虐待という言葉が非常に厳しい言葉なのでつらいんですけれども、例えば子育ての不安であるとか、そんな中でやりにくいとか、ちょっと叩いてしまったというような中では、実のお母さんが一番ご苦労なさってるということで、半数は実の母親です。

統計調査をしている部署によって、若干変わってくる点もあるということだと思います。

西邨議長

今、小川委員、藤井委員からご意見をいただきました。お二方のご意見を聞いてますと、「半分が実の母親」という言い切り方はしないほうがいいように私は思います。各委員さんはいかがでしょう。

荒田委員

父とか母とかいう名称じゃなくて、例えば保護者とか別の言葉に変えたほうが良いと思います。

西邨議長

事務局で、少し工夫をしてください。

では、次に「3. 学校と子どもの関係について」の3行目に「家庭の闇」という部分です。一番最初に私が質問したエンパワーメントと同じで、何か大きいくくりだろうとは思いますが、「家庭の闇」と言われると、とても暗いような気がします。この言葉の意味について、事務局の説明を受けたいと思います。

〈事務局〉

「1. 家庭教育の本質」以降につきまして、この間、こちらの会議の場での皆さん方のご発言を集約させていただきました。先ほどの「あるデータ」につきまして、藤井委員がおっしゃっていただいたように、ここでのご意見の議事録の中から取らせていただきま

した。

「家庭の闇」の意味につきましても、会議の中で出ていた言葉として、捉えておりますが、もしこの表現でない方が良いということであれば、事務局としてはこだわりはございません。

高木委員　　これは学校が直接関与、関知できない子どもたちの家庭環境、家庭状況の死角部分の意味なので「学校側から見えない家庭状況部分」などに変更してもいいと思いますが。

小川委員　　すみません、私の発言だとおもいます。「家庭の闇」について説明しますと、例えば子どもたち同士でトラブルがおきます。ただ、けんかは表面上で、実は両親が離婚の危機にある中で学校に来ているとします。学校で友だちと喧嘩しても、収まったら解消できると思いますが、実は本人の心の中には解消できていないという部分があります。子どもたちが抱えているものがあるのです。

それから、本当にお金がないために子どもたちに食事を作ってやれないという家庭も実際にはないことはありません。そういう、本当に学校ではどうしようもしてあげられない、してあげたいんですけど、してあげられないこと、「家庭の闇」とはそういうことを指すんですが。

高木委員　　家庭環境のベールをかぶった部分ということですかね。

小川委員　　そうですね。

西邨議長　　小川委員の説明も十分わかるのですが、響きとして、この文字だけを見ると、きつく聞こえるのですが、どうでしょうか。何も知らずこの文章だけを見る人には少し「家庭の闇」という言葉はきつく聞こえると個人的には思います。

〈事務局〉　　小川先生のご発言を聞いたときに、家庭で抱えているものが大きい子どもたちが、学校にいる間だけでも楽しく過ごさせることも学校の役割になっていること。つまり、子どもたちが学校に救われている部分があるという学校現場の状況について、記録したものです。文字にしてしまうと、文章が全体的に短いので伝わっていないのかもしれない。

小川委員　　健気な姿なんかがあるわけですよ、私たち大人が知ってることがあって。

西邨議長	そうですね。
小川委員	それが健気だと思うと、やはり学校にいるときだけは、せめて気持ちよく過ごしてほしいというように思うんです。決してそういう子ばかりではありませんが。もう学校にしようが家にしようが同じようなタイプの子もいますので。
岩谷委員	この言葉は、なくても意味は通じるでしょう。結局、子どもはさまざまなお話を抱えながら、学校へ来ているということでの言葉です。次の文章と上手につなげたら、この「家庭の闇」という言葉は必要ないと思います。いろんな課題を抱えながら学校に来ていて、そういうものは見えにくいけれども、学校に来ている子どもたちが元気よく過ごせることは、学校では大事なんだとつなげていけば、文章としてはおかしくないと思います。
西邨議長	他に何かございませんでしょうか。「学校と子どもの関係について」の下から5行目ぐらいに挨拶の話があって、その中に「言葉は時として人生を変える力がある」何かどこかの講演会で最近聞いたような話だと思いました。
岩谷委員	質問です。2ページ目に「これは、母親に子育ての負担がかかっているという現実的な社会状況による大きい」と書いていますが、多分、子どもへの虐待のことと思うんですが、この子どもへの虐待の主たる原因というのは、「母親に子育ての負担がかかっているという、現実的な社会状況」というのは大きいのですか。
藤井委員	「虐待」という言葉は非常に、きつい言葉なので、例えば「子育て不安」であるとか、子育てにしんどさを感じる、あるいは生活にしんどさを感じるというところでは、やはり女性に非常に負担がかかっていることは事実でしょう。例えば夫婦関係の中で夫が妻をどれだけカバーできているか。これまで、いろいろな子育てグループの方とお話をしたときに、私は、安直に、近所に親戚、例えばご主人のご実家があれば、そこへ子どもを預けたらいいということをお話ししたら、そのときに若いお母さん方が「夫の実家に子ども預けてどれだけ勇気が要ると思いますか。」って言われたんです。私も非常に反省したんですけれども、一般的な話としては、自分の実家に預けたらいいと言うけれども、個々のお母さんの立場に立ってみたら、物すごくしんどい。先程の小川委員のお話にもあったように「やっぱり自信がないし、どうしていいかわからない」ということがあって、そういう意味では社会的な支援とか、地域の支援とい

うのは必要ではないかと思います。そういう意味で、ここでおっしゃっておられるような家庭教育というのは、地域支援という意味で必要だと思います。父親の側からわからないことが、母親の立場ではあると思います。

岩谷委員 昔と一番違うのは、今、おっしゃったように、地域力とか横糸の関係ですよね。

藤井委員 そうですね。この「親と子どもの関係」のところがまとまりがないので、書き方に工夫が要するという感じがしたのですが、いかがでしょうか。

西邨議長 このあたり、各委員からも具体的に事務局に提案いただくよう、お願いします。先ほどからこうして全般的に文章を見て、皆さん方いろいろな議論をしている中で、はっきりと表現し過ぎているというような気がします。もう少し、全体的に表現を工夫した方が良いでしょう。後半でも、不登校ですぐに切れてガラスを割ったり…という言葉は、強調されているので、表現の仕方としては、もう少し工夫が要するという気がしました。いかがでしょう。

小川委員 2ページの上の親子関係の課題を解決する一助として、家族以外の人たちとのつながりという部分は重要だと思います。親と子どもが一体となってどこかに関わるのではなく、お互いに関わりあうことがすごくしんどくて、きちんと向き合えない時だってあると思うんです。子どもに静かにしてほしい、とイライラしたりするんです。そんな時、例えば1時間500円で少し子どもを預けて、1時間ほどデパートを回って帰ってきたら、ほっとする、そういうことってあるんですよ。働いている私でも、このまま帰ったら家のことが想像できるわけですよ。洗濯せなあかん、御飯つくらなあかん、何かいろいろしないといけないことがあるわけです。そうしたら、たった15分でもいいから、お茶を飲んで帰ろう、誰ともかわらない時間をつくってほっとすることで、次に子どもに優しい言葉がかけられる。私みたいな年代でも思うわけですから、今のお母さんたちというのは、もっともっと、そうなのではないでしょうか。谷間委員はどうですか。

谷間委員 そうですね。他のご家庭のことはわかりませんが、私の家庭では夫の仕事の都合で、子どもと父親との関わりが少ない気がします。娘とは2人でガール・スカウトの活動をしたり、来年のホノルル・マラソンに出場することを目標に、今年の4月は志摩ロードを走る

計画などでコミュニケーションをとっています。母と子2人で歩んでいるという感じですね。

小川委員 幼い子どもを抱えている母親が、時折少しパニックになる気持ちがわからないでもないです。そんな時に、母親と子どもを少し離してあげる時間があって、多少お金を使ってでもどこかに子どもを預けて、心をリセットして子どもに向かうということが必要だと思うのです。昔ならこんなことはあり得ないし、やってはいけなかったことだと思うのですが、今のお母さんたちは、とても疲れているのではないかなって感じることがあります。谷間さんのように、子どもが大好きで、本当に片時も離したくないというような、子どもに対する願いとか思いとかあるのではないですか。

谷間委員 最近考えさせられる出来事がありました。
娘が学校から帰ってきて、遊びに行ってくるという、自分の貯金箱からお金を持って行っていいかと訊くので、「いくら持っていくの？」と訊くと、300円と行って、お金を自分の財布に取り、出かけました。夕方5時過ぎぐらいに帰ってきて話を聞くと、一緒にいた友だちが、5,000円を持ってきていたと言うので驚きました。なぜそんなにお金を持たせるのか聞いてみたら、お母さんがずっと働いていて夕方もいないから、それで何か好きなもの買って食べなさいといわれているそうなんです。今のお母さんは、子どもにお金を与えて、自分は仕事や好きなことをしているのだろうか、と少し思ったりしました。お金をもらえない子どもは「けち」って言われるんですね。

小川委員 難しいですね。

西邨議長 小川委員は先程、今のお母さん方は、子育てでストレスがたまって大変だとおっしゃっていましたが、昔の我々の母親はどうしていたんでしょうね。石塚委員はどうですか。

石塚委員 小川委員のおっしゃられたことはよくわかります。
私は、夫が休みのときは、1時間でもいいからデパートをうろろろしてきたりしました。手作り絵本に関わったのは、保育付きの講座だったからかも知れませんが。枚方市は早くから保育付きの講座に取り組んでおられたので、それが目的で講座に参加したようなところもありました。実際、とてもストレス解消になりましたし、本当に小川委員がおっしゃられた、優しい言葉をかけられるというんでしょうか、自分の気持ちをリセットして、もう一度子どもに優しい

お母さんとして接せられるという効果は十分にあったと思います。

今私は、民間で2歳児、3歳児の教室を担当しております。2歳児でも母子分離を途中からしています。やはり悩んでいるお母さんがたくさんおられまして、手助けをしていただける方が近くにいなかったり、アドバイスをもらえる方がいなくて、もう泣きながら入ってこられることもあったりするんです。けれども、1時間～1時間半、子どもは子どもだけで楽しむ、お母さんはお母さんで何をされているかちょっとわかりませんが、多分お茶を飲んだり、いろいろされてるんだと思うんですけども、その時間があることによって、また優しいお母さんで戻ってこられて、いい親子関係が築けられたのではないかなと思うんです。小川委員が言われることはよくわかりますし、実感として今の若いお母さんにも、そういう時間を作っていただける環境が必要だと思います。

西邨議長

手前みそになりますが、現在、枚方市体育協会では、総合型地域スポーツクラブというのをやっております。幼児、小学生からご年配の方まで、メンバー数は700人ぐらいなんですけど、そこでも今回のような話を聞くんです。総合型のスポーツクラブですから、毎週いろんな場所で、いろんな内容をやっています。子どもをバレーボールのところに預けておいて、ご夫婦でテニスに来ているケースもあります。その時間帯は、子どもはそこに託したら、バレーボールならバレーボール、テニスならテニス、あるいは同じテニスに来て、子どもは子どもで指導者がいるので、自分たちは別に楽しめるんです。また、わんぱくスポーツというコースでは、どんなスポーツに向いているのかわからないので、いろんなスポーツをして遊びましょうというものがある。そのコースに参加するため、保護者が子どもを送ってこられ、その間に保護者は、他で文化教室のミニチュア粘土細工などをしながら過ごすというものもあります。すごく熱心にやっておられます。今、小川委員や石塚委員から話を聞くと、やはりそういう需要はあると実感します。子どもを預かるカリキュラムも結構あるんですが、そんな取り組みがもっと広げられたらいいですね。

石塚委員

そう思います。

西邨議長

ありがとうございます。事務局、このあたりのところは盛り込めそうでしょうか。

〈事務局〉

社会教育青少年課の事業におきましても、実は保育が目的で講座に参加される方もおられます。保育に子どもを預けて勉強したり、

親まなび講座で子どもと離れて、自分の思いを他の人に話すと、その人も自分と同じ思いをしたことがあるとか、共感し認められたことで、元気になって帰っていかれるケースがあります。その辺のことも、報告書に盛り込んでいきたいと思います。

西邨議長　　今のお話を聞いていると、子どもを預かって面倒をしっかり見るとか、預かっている間に、保護者の方にいろんな体験をしていただくというよりも、保護者と子どもを少しの間だけでも分離してあげるだけでも、保護者には十分メリットがあるというように聞こえます。事業の内容よりも保護者と子どもをひとときでも分離することが魅力的であるというように私は感じましたが、いかがでしょうか。

石塚委員　　保育室で子どもは子どもたち同士で、楽しい時間を過ごすわけです。枚方市では、本当にもう随分前から、保育付きの講座をたくさん実施しておられました。それも無料です。他市に絵本作りなどを教えに行くと、有料のところが多いです。枚方市民はとても恵まれているように思いました。

〈事務局〉　　現在は、事業予算の縮減に伴い、保育付きの事業が少なくなってきたと感じます。例えば、少し難しいテーマの事業など、子育て関係の講座でなくても、保育を付けることで、若い世代の方々の参加が見込めるのではと思いました。

西邨議長　　家庭教育推進事業のあり方を考えるときには、子育て真っ最中の母親の心境・気持ちというものを考慮することが必要かもしれませんね。

高木委員はどうか、ご自身の子どもさんが小さい時、子育てに関わりましたか。

私は、家族に「子育てには何にも関知しなかった」「子どもの小さい頃に子育てしてなかった」と未だに言われますが。

高木委員　　妻はどう思っているか分かりませんが、自分なりに子育てしたつもりです。職場が学校だったおかげで、子どもが幼児期の春休み、夏休みの多くの時間を子どもの養育に割きました。でも、大事なことはその結果であって、今日まで方々のおかげもあって人様に迷惑はかけていませんが、この先は分かりません。子育ては自分育てだと思っています。子どもの悲しい顔が浮かぶようなことは親にはできませんもの。この意味では子育てはこれからも続きます。

上田委員

私は、もう孫が成人を迎えている年代ですが、最近、妻に言われますのは、サラリーマンになりきっていましたが、帰りも遅い、朝も早いという状態で、子育てにほとんど関与しなかったし、妻が出産する時も病院に行かなかったと、時々いわれます。しかし、妻は実家に帰って、そのことをぼやくなんてことはなかったですね。それは自分の役目としてごく当たり前と受け取っていたようなんですよね、当時の社会では。

今のお母さんは、役目とは理解しているのでしょうか、小川委員がおっしゃるように、もう精いっぱいなんですね。よそを知らない、3世代生活もないということで、自分が非常に苦勞しているんだ、これはどうしていいんだろうと、わからない部分がいっぱいあるので、悩みが多いのではないのでしょうか。だから、やはり地域の中で支え合うといいますか、核家族化の弊害を補完するような活動が必要なのではないのでしょうか。

「あいさつ運動」もその一つでしょう。あいさつが発展して、小さなことでも、お母さんたちに声をかけられる。母親としての先輩の人と若いお母さんが声かけ合って話ができるようなつき合いができる、そういう社会になるといいと思うんですけどね。場所・地域によっては、一生懸命努力して取り組んでおられるところもありますが。

荒田委員

昔は、地域自体がインキュベーターの役割をしておりました。ところが、今、そのインキュベーターの役割がなくなってしまったんです。そういう点からいきますと、日本の長い歴史の中で今が一番、地域社会でのコミュニケーションが大事なとき、また、必要とされているときだと思います。

僕は29年間、自衛隊へ教官として行っておりました。若い子が入隊して、約3カ月で見違えるほどに成長します。環境が変われば、人間の行動は変わり、考え方も変わるとしみじみ感じました。

子育てに悩んでいるお母さんが、どんな方なのか詳しくはわかりませんが、結構、高学歴の人が悩んでいると聞いたことがあります。私の母親などは高等小学校しか行ってないが、息子の心をちゃんと読んでいたと話します。

話が脱線しますが、今、大学の価値がなくなりました。私は就職部長という仕事をしておりましたから、余計にそれを感じていました。大学1年生は高等学校4年生、高校生と同様です。そして大学2年生で専門知識を少しかじるんです。3年生になったらゼミすらもほったらかして就職活動に走り回るんです。担当教官も就活ですと言ったら、欠席扱いしない。そんな大学がすごく多いのですよ。

西邨議長	<p>日本の大学は入ったら終わりだといわれていますよね。よその国の大学は入ってからが大変だけど、日本の大学は入学するまでが試験で、その後は天国みたいなところだと聞くことがあります。</p> <p>お手元の資料から離れてしまいましたけれども、各項目でいろんなご意見を出していただいています。</p> <p>他の項目でまだ目の通ってないところがあります。先ほど一つ具体的話があったんですが、いかがですか。</p>
岩谷委員	<p>どこから引用されたかわからないですが、不登校には無気力型、怠学型、遊び非行型というのもあるんです。</p>
西邨議長	<p>なるほど。遊び非行型ね。そっちの方が響きとしてはぴったりきますね。</p>
荒田委員	<p>不登校のところは、子どもの性格の方に焦点が当たっているのではないですか。</p>
高木委員	<p>家庭教育推進事業の報告書は問題になった家庭に主に焦点が当たりがちとはいえ、その問題の原因、要因に踏み込んだ対策、多方面からの提案なども盛り込んだ報告書になればいいですね。</p>
西邨議長	<p>確かに問題のあるところばかりを解決するための家庭教育ではないでしょうし、あつてはいけないでしょうね。</p>
岩谷委員	<p>僕も一番最初、メモとったのが、最小不幸社会を目指すのか最大幸福社会を目指すのか、一見言うてることは同じことなんですが、元気が出るのは最大幸福社会と思うんですよ。だから、最初に稲田委員が言われましたが、否定的な書き方をしていくのは、最小不幸社会でネガティブな書き方になっていくと思います。基本方針であれば、もっとすっきりした文章になると思います。</p> <p>私は前回欠席したので、わかりませんが、こういう場合もある、こういう事例もあるということの中でまとめられたので、そういう文章にならざるを得ないと思います。</p> <p>親はこうあるべきみたいな部分を大上段に構え過ぎて、なかなか難しい内容ですね。</p> <p>ひとり親家庭とか、要保護・準要保護生徒の数、問題行動、携帯電話の所持率などにスポットを当てれば、かなり暗い内容の家庭教育推進事業の文章になってしまうし、8割頑張っている親御さんにスポットを当てれば、もう少し元気な書き方もできるかなという感じはしますけど。</p>

西邨議長 事務局から何かございますでしょうか。

〈事務局〉 今までの社会教育で取り組んだ家庭教育の事業というのは、福祉部の取り組みとは違う流れです。虐待を無くすというようなものでなく、学習を通じて多くの方と出会い、自分で課題を乗り越える力をつける、そして困難に出会っても挫けない、病気を予防するような役割があると考えています。

今後どうしていくかというときに、岩谷先生も言われたように、みんないろいろ悩みを持ちながらやっていくけども、何か元気になるような講座の展開のことを盛り込めたらと思っています。

西邨議長 今後の展開や今までの事業の説明をいただきましたが、この文章を、岩谷委員が言われたような方向で、もう一度つくり直すというのは可能ですか。

〈事務局〉 今日はいろいろなご意見をいただきましたので、修正なり表現を変え、事務局の方で案を作りたいと思います。

この間、ご議論いただいてきたことは重要なことでありますし、例えば先ほどいろんな市の事業の中で、保育付きの事業で救われたことがあるということについては、大事なことではないかと思いません。

例えば社会教育部と中央図書館では、それぞれいろんな市民対象の事業を実施していますが、すべて保育付きの事業としているかと言うとそうではありません。しかしながら、保育付事業は求められている、潜在的なニーズも含めてあるということは、今回の議論の中でも重要な点であると思います。

それを含め、すべて文章表現を変えてしまうのではなくて、全体的な表現調整をさせていただきます。大きく変えてしまうのではなくて、残す部分は残すような形でとありますが、どうでしょうか。

西邨議長 というように事務局からご意見をいただいておりますが、いかがでしょうか。

冒頭で、今後の会議の進め方を話しましたが、次回で結論、方向をまとめるということになっておりますので、お持ち帰りいただき、じっくりとお読みいただいて、事務局に、ご連絡をしていただいて、その上で事務局のほうで取りまとめて再度作っていただくというような方向にさせていただきたいと思えます。

〈事務局〉 今おっしゃっていただいたように、できれば、3月、4月の2カ

月ぐらいで、ご意見やお気づきの件がありましたら、メール、あるいは書面、電話でも結構ですので、事務局のほうにいただきましたら、本日の会議の内容も踏まえまして、5月、6月にかけて、事務局で修正をさせていただきます。7月に会議を予定しておりますので、6月中には集約したものを事前に読んでいただけるように、各委員の皆さんに送付させていただくようにいたしますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

西邨議長

次回は、作り変えたものを事前に送っていただけるということで、その折にはご家庭のほうでご熟読していただけるものと思ひます。

他にどうでしょうか。

小川委員

実は、私は小学校の校長として2校目ですが、親が懇談会になかなか残ってもらえない現状があります。前の学校も、今もそうなんです、例えば1年生の就学説明会に来る時に、小さい子を連れてきますが、その時に預かってくれないんですかと聞かれるわけです。学校では、その対応は困難な状況にあります。しかし、1年生に上げるということは、下に三つとか四つの子がいる。けれども、就学説明会をきちんと聞きたい。でも、小さい子がいるから聞けないという現状なんです。参観なんかも見られるけれども、幼児を一人で家に帰すと、懇談会に出られない。今、そういう現状が生まれてきているんです。だから保育だけではなく、来年度は親を残す戦略を私の方も考えたいと思っています。中学校は多分そういうことはないと思うんですけど。

岩谷委員

ありますよ。

小川委員

授業中に懇談会を行なうなど、とにかく小さい子とか、今いる2年生、3年生を学校に置いたまま、担任や学校が思っていることを親に伝えるという方法をとっていかない限り、学校教育もうまく伝わらない時代。ということは、今、お母さんたちはとにかく子どもとのジレンマみたいなものを本当に持っていて、あるときは一緒に帰れるから、参観は見たけど、懇談には残らずそのまま連れて帰る、本当に矛盾してるんですけど、あるときは子どもと一緒にいたい、またあるときはちょっと子どもと勘弁してほしいという、そういう何とも言えない複雑な状況があると感じているんです。

だから私は来年度に授業中に懇談会を持って、もう絶対に親を帰さへんと、子どもが学校にいてほしいと、だから、ちゃんと先生の話聞いて帰ってね、というようなことをしていかないと、私たち

がやろうと思ってることは伝わらないと考えています。

勝手な親と言えばそうなのですが、子どもが誕生してから一生懸命見ていた。学校に上がった。やっと学校に行ってくれて、8時間ぐらい学校が預かってくれるからラッキーと、こういうようになっていく親もいるんですね。幼稚園の先生と話をする、幼稚園に迎えに来た保護者の姿を見たらテニス・ウェアだったりとか、「えっ？」と思うようなことがあるそうです。やはり親が本当にしんどい部分、それから矛盾した部分を抱えながら、今、子どもたちを育てているというか、親自身があるのかなという気はするんです。

まとまりがないですが、何とかプラス方向に進めていくためにマイナスのことではなくて、プラスの人たちをできるだけ、こっちへ向けていき、それを口コミで広げていってもらいたいというか、もうそういう手しかないかと思っているんです。だから、この家庭教育の事業もターゲットを意識してきちんとやれば、よかったという声が次の引き金になって、少しずつ輪が広がっていくと思います。岩谷委員が言われたように、否定からはものは始まらないと思いますので、肯定的に物事を考えて進めていくことが要ると思っています。

岩谷委員

この前、中川信雄先生に講演に来ていただいたんです。そのときに、保護者の方が障害のある子どもを連れてこられたのですが、PTAの本部役員の方が臨機応変に対応してくれたんです。先程の保育の話とも関係してくると思いますが、そういう小さい子どもも連れてこられるような入学説明会に我々も工夫していかないといけないのではないかということを、今日教えてもらったと思います。だから、講演に来られるような環境にしていくために、何か企業的な発想で集客できるような、アイデアをもっと学校も出していかないといけないと思いました。今日は逆に社会教育から学んだという感じがしました。

西邨議長

ほかにご意見ございませんでしょうか。

(「なし」の声あり)

西邨議長

次回の日程について事務局から提案等ございますでしょうか。

〈事務局〉

7月中旬でと考えておりますが、7月5日か6日をお願いしたいと考えております。

西邨議長

7月6日の水曜日の午後4時からということで、いかがでしょうか。本日ご欠席の委員さんもおいでになりますので、ご確認をして

いただいて、第一案としては6日ということで決めさせていただきたいと思います。

会議はこれで終わります。ありがとうございました。